チャラクサバレーへの旅

鳴　海　玄　希（JAGU）

そして我々は退却を決意した。

夜半から降り始めた雪は、明るくなっても止まず、未だ降り続けている。昨夜は暗闇の中、アイスフルートを登り続け、“フォートレス”の頂上付近まで迫ったものの、平らに見えたその頂きは、どこまでも続くナイフエッジだった。やむを得ず60mで２ピッチ程ラッペルした先に外傾したテラスを見つけた。氷を削り出して平にし、そこにテントを爪先立たせた。

氷河からそそりたつ壁に取り付いて５日目の朝。バットレスに走った複雑なクラックシステムに雪稜、数回のラッペル、そして肩幅程のチムニーに食い込んだ被り気味のアイスを、クライミングシューズとアイゼンを使い分けながら、なんとかここまでやってきた。恐らく一番面倒なパートは既に足下にあり、後は残りの標高差600mの雪稜と岩を駆け上がるだけだ。２日、あと２日あれば山頂に行って戻ってこられる。燃料と食糧は十分に食い伸ばせるだろう。ただ天気さえ良ければ。

取り付いて５日目。天気が崩れて敗退を決断する

2022年７月、５人は羽田空港に集まった。コロナ渦以降、それぞれにとって久しぶりの海外登山だ。ジャンボ、鳴海は未踏のK７中央峰を、佐藤、田中、坂本の３人はチャラクサバレーに広がる良質な花崗岩でのクライミングを、それぞれ目標にこの日を迎えた。皆かれこれ20年、あるいはそれ以上、様々なタイプのクライミングを続けてきた。その間に何人かの友人は山で死んでしまったし、このメンバーの内何人かも死にかけた。それでもまたこうして高峰に向かう理由は一言では説明できないが、これから最高に楽しい40日間が始まる事だけは間違いない。仲間に恵まれた人生というのはなんと素晴らしいのだろう。

私とジャンボが、初めて海外登山に出かけたのは、2009年のアラスカだった。あれから13年、ジャンボ家には奥さんと３人の子供達が、私には会社員として働く妻と１人の娘がそれぞれおり、昔のように毎週山に繰り出しては、夜遅くまで登って日付が変わってから帰宅、というのは中々難しい。それでも、少し視点を変えれば、近くの山でも課題はたくさん見つかった。冬はこれまで余りやったことの無かった、八ヶ岳周辺での継続登攀や西上州の薄氷、春はスキーを履いて久しぶりに槍ヶ岳に向かった。梅雨から初夏にかけては、瑞牆山や金峰山周辺での継続登攀を繰り返し、ハードとは言えないまでも、色々と考えながら、久しぶりの海外登山へ向けてトレーニングをこなしていった。

雨予報、平日の誰もいない瑞牆山。ふと耳を済ま

せると聞き覚えのある声がする。あの３人だ。彼らも着々と準備をしているのだろう。

2020年の秋、横山家にあった、カラコルムの本をなんとなく手にとった私に、ジャンボが声をかけてきた。
「お、ちょうど俺もゲンキとどこかに行く事、考えてたんだよね」。
「Ｋ７中央峰。未踏なんだよ」。
パキスタンにはいつか行きたいと思っていたし、ピーク自体が未踏、尚且つほとんど写真すら無いK7氷河に回り込んで北面を登るという、未知数たっぷりのプランに、私はすぐに飛びついた。
結局2021年はコロナ渦が落ち着かない上に、２人共あちこち怪我をしてしまい出掛ける事ができず、年が明けた2022年冬シーズンからトレーニングを開始して、久々の高所登山へ向けて準備を進めて行った。

私にとって初めてのイスラマバード、そしてイスラム教の国。思っていたよりも暑くはないが、ここでの滞在は最低限にして、さっさと登山者にとっての玄関口である、スカルドへ飛ぶ予定だが、ここで大問題が発生。出発前日は金曜日、つまりイスラム教徒にとっての祝日で役所系は全てお休み、即ちリカーパーミット（外国人及び非ムスリム向けの酒類購入許可証）が取得出来ないというまさかの事態が発生してしまった。
出発前に佐藤がト〇スをナルゲンボトルに移し替えていたのを「わざわざ酒を持ち込むのにどうしてそんな安酒を」と、散々馬鹿にしていたが、まさかそのト〇スに頭を下げてお世話になるとは、不覚の至りであるが仕方がない。

今年のパキスタンは天候不順で、６月から７月前半にかけて、スカルド行きのフライトの欠航が相継いだそうだが、入国してから３日後、無事我々は機上の人となった。余程日頃の行いが良いに違いない。
暮れなずむスカルドの街中に、アザーンが美しく響き渡る頃、全ての買い出しと準備を終えて、明日はいよいよフーシェへ向けて出発だ。と、ここでさらに問題が発生。イスラマバードから風邪っぽかったジャンボの体調が更に悪化。発熱と共に咳も酷いがここまで来たらもう行くしかない。コロナじゃない事を祈るのみだ。

出発５分でタイヤのパンクに見舞われながらも、丸一日のドライブで、フーシェへ。美しき最後の村を散歩していると、マッシャブルム南面の威容と、人懐こい子供達が歓迎してくれた。ここで約40人のポーターを雇い、翌日早朝からキャラバンを開始。途中でボルダリングをしながら２日間をかけて、チャラクサバレーへと入っていく。
ジャンボと裕介にとってはそれぞれ数年ぶりのＫ７ベースキャンプである。ジャンボお気に入りのボルダー群のすぐ近くには、Ｋ７南西稜から敗退してきたばかりのイギリス隊がベースキャンプでくつろいでいた。

聞くとメンバーの内１人が落石を受けて手を骨折し、わずか２ピッチ目で退却となったそうだ。怪我をしたのは、メンバーの内１人の養子、父親は彼が生まれる少し前に初めてこの地を訪れて、今回がなんと十数年ぶり、４回目のトライだったそうだ。
彼らの過去約30年、４回に渡る南西稜の物語。「流石に今回が最後だよ」そういって全ての写真を渡してくれた時、私の心は密かにこの長大なリッジに傾き始めていた。好天の中、今まさに中央峰にトライ中のアメリカ隊の動向も、気にならないと言えば嘘になる。

通常はベース入りしてから最初の数日は、荷物を片付けたり散歩したりしながらのんびり過ごして、まずはこの標高に体を慣らしていく。しかし、今回その時間は無かった。

我々は少しでも予算を削りたいため、５人１チームとしてまとめて登山許可をとっていた。「チャラクサクライミングツアー」と称する佐藤らのチームは、我々よりも10日程早く帰る予定であった。ところがベース入りして初日、その事をリエゾンオフィサーに話すと、「隊としての別行動は絶対にだめ」だと言う。いくら説得しても譲らず、イギリス隊やアメリカ隊のリエゾン、さらには衛生電話で彼の上司にまで確認を取ってしまったので、もう藪蛇もいいところ、誤魔化し様も無くなった。

と言う訳で、ジャンボ・鳴海ペアは予定より10日も早くベースキャンプを撤収しなければならなくなった。我々に与えられた時間は7000m近い山をトライするにはとても短く、もうゆっくりしている暇などない。翌日にはベースから500m程上がった、4,800m付近まで偵察。その翌日には順化活動を開始し、４日後には6,000m付近の稜線まで登って行った。

猛烈な暑さ。佐藤らが2016年にフリー化した、巨大なベアトリス東壁の前を通過して北側のプラトーへ出ると、そこは強烈な日射が、遮るものなど一切無しに降り注ぐ、灼熱地獄の氷河であった。昼間は頭痛がして、流石に標高を上げるのが早過ぎたと思ったが、夜には痛みが治まった。あれは恐らく高度障害ではなく、熱中症であろう。

私が温暖化の影響を最も強く感じるのは、後退した氷河を見た時だ。数年前にジャンボらがテクテクと歩いて通過した箇所は、崩壊が進んで迷路のようになっていた。暑い日には、懸垂氷河の下に川が出現した。そしてその川の流れは下流で更に増水し、降雨と相まってパキスタン全土の１/３を水没させた。

日本には氷河が無いせいか、私も含めて日本人は、欧米の人々と比べて環境問題への関心がとても低いように感じる。しかし、何かしら行動を起こさなければ、脆弱な人々が苦しみ、雪や氷河は消えていき、自分達の登る場所や滑る場所までもが無くなってしまうかもしれない。我々登山者は、自動車や航空機の使用をはじめとする自分達の行動で、他人はおろか、自らの首をも少しづつ締めている事を、意識すべきでは無いかと思う。

順化が終わる頃には中央峰にトライ中のアメリカ隊も、きっと戻ってきているだろう。他人の事とはいえ、やはり自分達が元々狙っていた山に挑戦中の、彼らの動向は気になる。

ところが、ベースキャンプを離れてから12日以上経っても彼らは下山してこず、途中から連絡も途絶えていた。快晴無風が何日も続いた完璧な好天周期も明らかに終わりを迎えようとしているし、そもそもアルパインスタイルでこれだけの期間、壁の中に居座り続けるのは相当過酷なはずである。それに彼らの高所登山の経験は決して豊富であるとは言えないだろう。

遭難の可能性も考え始めた更に数日後、入山14日目にして彼らは無事下山してきた。山頂直下100m程のスラブが超えられず敗退したそうだが、巨大アイスハンモックでのビバーク、スラブでのフォール、そして下降はセラックだらけのガリーを下降と盛り沢山の冒険だったようだ。

中央峰は未踏のままに残ったが、我々は既にＫ７主峰の南西稜にターゲットを定めていた。

Ｋ７は1984年に東大スキー山岳部隊が初登して以来、全部で４回程登られているが、そのどれもが南

から東向きのクーロアールを通過しなければならず、常に落下物や雪崩の危険に晒される。30年前は雪の詰まったジャパニーズクーロアールも、今や常に雪崩ているガレ主体のルンゼになっており、とてもじゃないが近寄れない。この異常な気温上昇に於いては、この巨大なリッジのみが唯一安全に山頂にアクセスできるラインだし、何よりもチャラクサバレーで最も目を引く美しいリッジだ。アプローチもベースから１時間と、時間の無い我々に取ってうってつけであった。

出だしの２ピッチ分のみ、イギリス隊が置いて行ったフィックスを使用して、そこから南西稜へ取り付いた。今日はロープ約５本分をフィックスして夕方ベースに戻る予定だ。昨日の雨で若干しっとりしている部分もあるが、岩質は概ね素晴らしく、快適なクライミングが続く。私に取っては初めての、高所に於ける純粋なロッククライミングだ。今日は少し肌寒いが、おどろおどろしいＫ６北壁をバックに、どこまでも続くクラックを交代でリードした。イギリス隊はこの部分は登らず横のガリーからアクセスしているが、我々は「シットダウンスタート」する事にしていた。「強点」をつく以上、できるだけ忠実に、末端からこの美しいリッジを詰めたかった。

Day 1

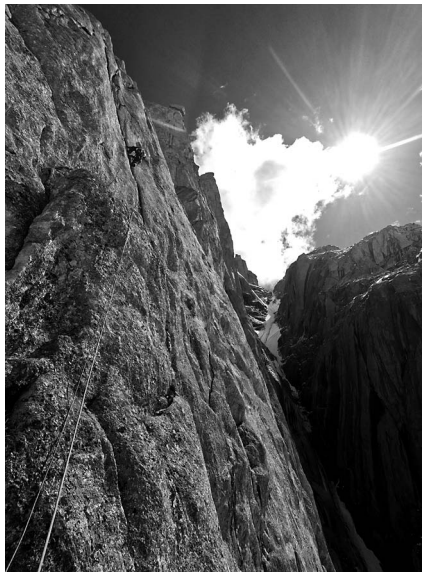
降り続く雨をベースキャンプでやり過ごした３日後の８月２日午前２時。以前はゴーアップ前は一睡もできない事も多かったが、今日はなんと寝坊してしまった。ジャンボに起こされて慌てて準備をしテントから飛び出す。ダイニングテントで光るランタンの明かりだけが暗闇の中で煌々と輝いていた。

夜がひっそりと開ける頃、フィックスロープを登り始めた。降り続いた雨でロープはずっしりと重くなり、途中いきなり外皮を少し傷めてしまった。空は曇りがちで岩も少ししっとりしているが、クラックはきっとどこまでも続いているだろう。この岩と氷と雪を擁した美しく巨大なリッジでの数日間、一体何が待ち受けているのか。

大きなテラスからフィックスロープとアタックに不要なものを詰めたホールバッグをぶん投げると真っ逆さまにフリーフォールした後、どかーんと音を立ててバウンドしながら、丁度帰りに通過しそうなところで止まった。

僕はチームで１ペアしかないクライミングシューズに履き替えるとリードし始めた。途切れ途切れのクラックを右に左に探しながら進んでいく。同時登攀でさーっと駆け抜けたい所だが、クラックが途切れていたり、悪いセクションが数手あったりして中々スピードは上がらない。5.10程

初日。快適なロックピッチをリードする鳴海



ファーストタワーの鳴海

度のクラックも高度の影響と、絶対に怪我は許されないと言う事を考慮すると、かなり慎重に登らなければいけない。

結局ほとんどのピッチで荷揚げとユマーリングを要求され、新品のパックと外付けしたアックスは１日目にしてかなりボロボロになってしまった。

暗くなる直前にテントが丁度収まるナイスなテラスを発見し１日目のビバーク地とするが、残念ながら水がない。岩陰に残る僅かな雪をかき集めて、砂利だらけの夕食とお茶を啜った。

１日目。重荷を担ぎながら美しいクラックをリードする鳴海

Day 2

Ｋ６の山頂に僅かに日が当たる頃、２日目のクライミングを開始した。昨日の雲はどこかへ行き、青空が広がっている。

今日も途切れ途切れのクラックをどうにか繋ぎながら高度を稼ぐ。クラックの場合、氷と違って急に閉じたりして続いていないことがあり厄介だ。巨大チムニーの中は薄氷が張りかなり厄介そうなので、被ったクラックシステムをエイドしていく。フリーでいけない事もなさそうだが、クラックの中は濡れているしこの高度だと下界の様には体は動かない。エイドからフリーに移った後も案外悪いチムニーが続き、荷揚げはめちゃくちゃに引っ掛かり大変だ。

わずかな雪のセクションをクライミングシューズのキックステップで上がると、平らな雪田が広がっていた。ブーツに履き替えて雪の斜面をトラバースすると、過去の隊が南西稜のスタート地点としていた、通称「ジャティングレッジ」が見えてきた。

複雑なリッジを時にはラッペルしてラインを探る

60m、２ピッチの懸垂下降でコルへ降り、そこからクーロアールを同時登攀で登り返すと、昨日同様、４スターのビバークを約束する、平らなレッジが見えてきた。しかも今日は雪もあり水もたっぷり飲めそうだ。小渕沢のDILL特製の“スモールツイスト”が今日も美味い。

２ビバーク目でご機嫌のジャンボ

Day 3

ビバーク地を出て雪田を登り「サードタワー」を

回り込むとヒレが折り重なった様な壁が見えてきた。出だしの雪壁を越えてから不安定な体勢で慎重にクライミングシューズに履き替えて登り出す。クライミング自体は5.9位だが「ヒレ」は時折グラグラしており結構ランナウトする。おまけに朝一で体は目覚めておらず今日は曇っており寒いので、かなり慎重にリードする。

サードタワーの“フィン”ピッチをフォローするジャンボ

そこを超えると壁に日が当たり、今までで最も快適そうなクラックが見えてきた。

「コンテで行けるかも」「最高！」叫びながらリードして最初の壁を乗っこすと、険悪そうなチムニーが見えてきた。「またピッチを切るのか」言いながらビレイポイントでジャンボを迎えると、私は左にトラバースし始めた。そちらに行けば簡単な雪田に出られる様に見えたのだが、行ってみると雪田直前で壁は切れ落ちている。まともにプロテクションが取れない30mのキャットウォークを、時折迫り出した壁に上半身をのけ反らせながらまたビレイ点に戻っていった。

正面のスクイーズチムニーを登らなければならない。高所でのワイドクラックはどんなに力を抜きながら登っても息は切れ、大して難しくないのに登り切る頃には超酸欠状態でぶっ倒れそうだ。

その上は雪田となっており、またブーツに履き替え、アイゼンを装着する。履き替えは面倒な上、クライミングシューズはまだしも、ブーツを落としたら進退極まってしまう。慎重にブーツに足をねじ込んでジャンボに続くと、巨大なダイヤモンドの形をした岩の辺りで懸垂ポイントを探していた。ここから２ピッチ程下降してジャパニーズクーロアールに合流し、”フォートレス”基部を目指して登っていく。

サードタワーからの下降点を探るジャンボ

サードタワー最上部にて

真っ暗闇の同時登攀。前を行くジャンボのヘッドライトが前方の壁を照らしている。ビバーク地を探しているのだろう。と、「ヤッホー」と嬉しそうな雄叫びが聞こえてきた。

完璧に平らで安定した雪田で今日はセルフビレイすら必要なさそうだ。夜中、何かの塊が何度かどさっと落ちてきたが、きっとクラックに詰まった雪だろう。

Day 4

5スターのビバーク地を後にし、今日はいよいよ“フォートレス”のクライミングだ。名前のとおり一見して弱点は少なく、どこを行っても凄い傾斜だ。最初に目を付けていた左手のガリーは、恐らくは日本隊の初登ラインであろうが、申し訳程度に氷が詰まった強傾斜のチムニーで、昨日から散見された1984年当時のRCCボルトも一切見当たらない。ラッペルで1つ右のガリーを見に行くと、肩幅より少し広いクーロアールに時折被った氷が張っていた。2004年にアメリカ隊が登ったラインであろう。

「ここしかない」

ジャンボがロープを伸ばしていく。ぶっ立っている上に氷質もイマイチっぽく、悪そうだ。上に行くほど幅は狭く傾斜はきつくなり氷も頼りない。おまけに私はクライマーの真下で落氷を浴びながらのビレイとなり、新品のヘルメットが1発で大きく凹んでしまった。凹んだのが人間じゃなくて良かった。

フォートレスの核心ピッチをリードするジャンボ

ここを抜けても中々許してもらえず、雪、氷、そしてまた岩とその度に履き物を変えながら進んでいき中々スピードは上がらない。夕暮れ間際になんとか傾斜が最も強い部分を足下にし、上部雪田に出た。今日も快適なビバーク地を求めてさらにロープを伸ばしていくが、どこまで行っても傾斜は落ちず上部はナイフエッジとなっている。腕時計で6,300m弱、フォートレス最上部辺りで真っ暗になり、仕方がないので100m程下降した辺りでジャンボが見つけた小さなレッジを本日のビバーク地とした。なんとか氷を削り出し、テントの8割程を乗せてそこに潜り込んだ。

長い1日となったが、おそらく、いちばんややこしい部分は越えているだろう。予定より1日か2日、余計にかかりそうだが、食糧は食い伸ばせそうだ。ベースで待つ3人は心配するだろうが、ここまできたら山頂はもうすぐだ。行くしかない。

Day 5

明るくなる直前、テントを叩く雪の音で目が覚めた。爪先だったテントと壁の隙間にどんどん雪が溜まり始め、明るくなっても止む気配は無い。ここから先は雪の要素が増し、これ以上進んだ場合は、セラックや雪崩地形へ晒され、下降はより厄介なものになるだろう。最低でもしっかりとした視界が無ければ進退極まることになる。

昼頃になっても止まない雪。翌日からの悪天予報。僕らは決断しなければならない。上へ？それとも下へ？

Day 6

昨日は暗くなる直前にスノーバー1本に掛かったロープで巨大なハンギングセラックを空中懸垂で下降し、この安定したビバーク地へ辿り着いた。

敗退を決めてから2ピッチ程でリッジを離れて、2004年にスティーブ・ハウスが降りたガリーを、ひたすらアバラコフを作りながら下降を続けた。雪は途中で雨混じりになり、時折日が差すと氷は溶けて、僕はジャンボが下降している間、アンカーに日陰を作って少しでもアバラコフの強度が落ちない様にし

た。上部セラックは絶え間なく崩壊し、こちらまではデブリは来ないものの、気持ちの良いものでは無かった。

柔らかい氷にアバラコフを作り下降を続ける

今朝は少しゆっくりした後、更に何度かのラッペルをこなして氷河に降り立った。山を見上げると、そこまで天気が悪いわけでは無いが、山頂付近は雲に覆われており視界はなさそうだ。

昼ごろベースキャンプに戻ると、３人の仲間とコックのイクバル、キッチンボーイのスカンダールが笑顔で迎えてくれた。

佐藤が嬉しそうに「またこうやってみんなで飯が食えて良かったなあ」と、言った。「イッチーが生きていたら、お前ら切腹だ」って怒られそうだなあ。ジャンボさんが呟くと、「いや、それは無いよ」と、佐藤は言った。

本当であればアタックの後は数日レストしてから移動したいところであるが、冒頭にも書いたように下山日は決まっている。翌日早朝から疲れた体に鞭打ってバックキャラバンを開始、夕方にはフーシェへ戻った。流石にここで１泊したいところだが、なんでも明日から始まるアーシューラー祭で、今夜には道路が封鎖されるらしい。半ば無理やりジープに押し込まれると、ドライバーのアノワールはいつも以上に荒い運転で車をぶっ飛ばし、封鎖直前のチェックポイントを通過した。そして夜遅くに、祭りの準備でやけにひっそりとしたスカルドの街へ戻った。

バックキャラバンの朝、空になったベースキャンプ 離れながら、僕は何度も何度も後ろを振り返って、登れなかった美しい南西稜を見た。雲は多いものの、時折、山頂が見えた。

「山頂まで行っていたら戻ってこられなかったかもなあ」。

ジャンボは疲れた顔でぼそっと言った。

標高6,300m、氷河から1,800m登り、山頂まで残り600mを残したあの場所で、僕らが下した判断はきっと正しかったのだろう。だってまたこうやってみんなで笑いながら飯が食えてるんだから。

ザ・チーム。みんなで楽しく過ごした

<日程>

7 /13 出国

7 /14 イスラマバード着

7 /16 スカルド着

7 /18 フーシェ着

7 /19 サイチョ着

7 /20 ベース着

7 /21 4,800m位まで偵察

7 /22 順化開始、5,200m泊

7 /23 5,600m泊

7 /24 5,900mへピストン、5,600m泊

7 /25 ベースへ下山

7 /26 - 28 ベース滞在、準備、天気待ち

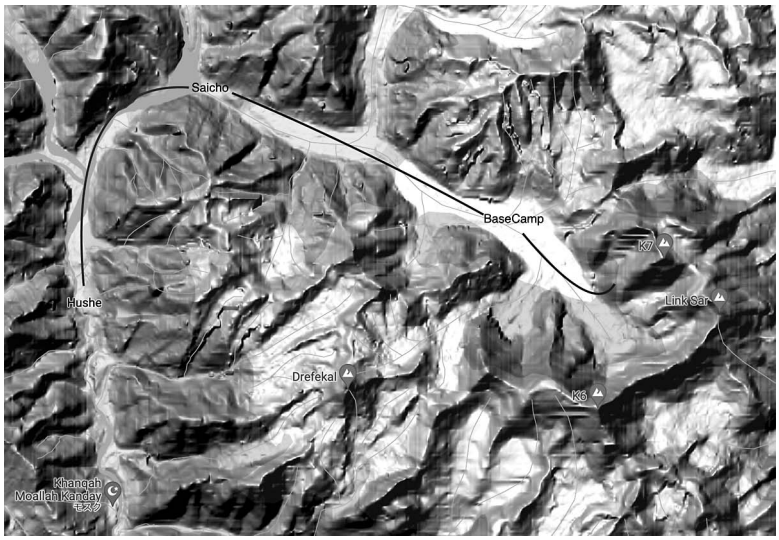
7 /29 下部 5 ピッチ分をフィックス

7 /30 - 8 / 1 ベースにてレスト、天気待ち

8 / 2 アタック開始。ファーストタワーの上部でビバーク

8 / 3 ジャディングレッジを経由して傾斜の緩いガリーへ。サードタワー基部でビバーク

8 / 4 サードタワーからラッペルでジャパニーズクーロアールへ合流。フォートレス手前でビバーク



チャラクサバレー周辺地図

K 7 グループ全員と登攀ライン

8 / 5 フォートレスの登攀。正面の強傾斜のアイスへ。夜、フォートレスのトップ付近6,300mに到達するも、ナイフリッジが続きビバーク適地が無さそうなので、ラッペルで100m程下へ戻る。

8 / 6 退却を決める。数ピッチ同ルートを下降した後、クライマーズレフトのガリー（ハウスデセント）へ合流。暗くなる直前に最後の懸垂をスノーバーの空中懸垂で一応の安全地帯へ。

8 / 7 残りの数ピッチの懸垂をこなし午前中に氷河へ降り立つ。昼頃ベースへ帰還

8 / 8 バックキャラバン開始。夜遅く、スカルドへ

8 / 9 荷物整理など

8 /10佐藤、田中、イスラマバードへ

8 /11 サリンにて休養

8 /12 佐藤、田中帰国、鳴海、横山、坂本はユーゴへ移動、

8 /15 坂本、鳴海、フンザへ移動、横山はユーゴにてステイ

8 /20 イスラマバードへ向けて移動

8 /21 夜イスラマバード着

8 /22 出国

8 /23 帰国

<その他雑感>

・横山・鳴海は約80万円/１人（航空券代等含む）。コロナ禍とウクライナ戦争の影響で、2017年よりも人件費、ジープ代等は２倍近く、後半は金欠になり苦労した。

・ポーター、ジープ共、人数や台数を決めるときに、先方に任せっきりにすると、余分に雇用する事になり、余計な金がかかる。

・日本人に馴染み深いニッパトラベルは2022年を以て休業予定。次回より新たにエージェントを探す必要があるが、サービス内容、レンタル用品（ベース用テントやテーブル、椅子、ソーラーパネル等）、価格等は各社様々であり、必ず数社から相見積もりを取って、最良のトラベルエージェントを選ぶべき。

・晴れるととにかく暑い。南面のミックス壁や日射の影響を受けるガリーなどは事前情報と現場のコンディションに大きな差がある可能性が高い。またUVカット機能付きのロングスリーブ等があると良い。